



第275号

公益社団法人
医学振興
銀杏会

(編集同人)

荻原俊男 杉本 央
富田尚裕 上田啓次
朝野和典 木村 正
森井英一 日比野浩
久保盾貴 馬場幸子

いて定時社員総会が開催され、2025年度事業報告および収支決算、会計監査報告が承認されたほか、2026年度事業計画および収支予算の報告が行われ、任期満了に伴う次期代議員候補者が承認された。

議事終了後は寄附の報告が行われ、引き続き助成金および奨学金採択者への目録授与式が執り行われた。まず、吉川秀樹理事長より、地域医療に関する研究助成金採択者3名および学友会奨学金採択者15名に対して目録が授与された。続いて、岸

令和
8年度

医学振興銀杏会総会を開催



(地域医療に関する研究助成、学友会奨学金、岸本基金奨学助成金) 採択者一同と、吉川理事長、岸本名誉理事長

令和8年度医学振興銀杏会総会(定時社員総会)は、5月30日(土)、銀杏会館3階阪急・三和ホールにおいて開催された。総会は金倉副理事長の司会により進行され、多くの代議員ならびに会員の参加のもと盛会裡に執り行われた。

開会にあたり、吉川秀樹理事長より挨拶が行われ、その後、会員動静の報告、物故者への黙祷、叙勲等表彰者の紹介がなされた。続

本基金奨学助成金採択者13名に対し、岸本忠三名誉理事長より目録が授与された。岸本名誉理事長からは、将来の医学・医療を担う学生に向けて温かい激励の言葉が贈られ、会場は大きな拍手に包まれた。若手研究者および学生の挑戦を支援する銀杏会の理念が改めて共有される機会となった。

休憩後には、大阪大学大学院生命機能研究科教授の長澤丘司先生による特別講演が行われた。「なぜ血液・免疫細胞は骨に囲まれた骨髄のみで造られるのか?—特別な環境(ニッチ)の実体をつきとめる—」と題した講演では、造血幹細胞ニッチ研究の最前線が紹介され、参加者は基礎医学研究の新たな展開に耳を傾けた。活発な質疑応答も行われ、有意義な講演会となった。

続いて学内現状報告として、石井優医学系研究科長、坂田泰史病院長、尾路祐介保健学科長、高倉伸幸微生物病研究所副所長、深川竜郎生命機能研究科長から、それぞれの部局の現状と今後の展望について報告がなされた。最後に吉川理事長より閉会の挨拶が述べられ、本学および銀杏会のさらなる発展を祈念して総会は終了した。

小玉尚宏(平14)

研究助成の公募

当会では、今年度も公益事業の一環として、下記の研究助成を行います。

(募集要項・申請書類は下記URLより)

<https://www.ichou.or.jp>

▶地域医療に関する研究助成

対象 地域医療に貢献している病院・施設で行われている疾病の診断・治療等に関する研究をしている若手研究者(40歳未満)への助成

募集期間 9月1日～11月30日

助成額 1件50万円程度

助成件数 3～4件

▶国際学術交流助成(後期分)

対象 外国で行われる国際学会等(9月1日～令和9年3月31日の間に行うもの)において成果発表をされる若手研究者への渡航費用助成。

募集期間 10月1日～11月30日

第38回 医学振興銀杏会シンポジウム

開催日 令和8年10月23日(金)午後3時開会

会場 銀杏会館3階 阪急・三和ホール

テーマ **がん免疫治療の最前線**

[コーディネーター] 樂木宏実副理事長(市立伊丹病院 事業管理者)、

保仙直毅先生(大阪大学教授 血液・腫瘍内科学)

[基調講演] 坂口志文先生(大阪大学 特別栄誉教授/免疫学フロンティア研究センター実験免疫学 特任教授)

[パネルディスカッション]

「血液がんに対するCAR-T細胞」

保仙直毅先生(大阪大学教授 血液・腫瘍内科学)

「固形がんに対するチェックポイント抗体療法」

小玉尚宏先生(大阪大学教授 消化器内科学)

「がん免疫療法に伴う副作用と多職種連携で行う副作用管理」

西田純幸先生(大阪大学特任教授 呼吸器・免疫内科学)

(要旨) ノーベル生理学・医学賞受賞者の坂口志文先生を基調講演者にお迎えし、阪大病院でがん免疫治療を実践されている3人の先生方と共に、「がん免疫治療の最前線」を語っていただきます。坂口先生が発見された制御性T細胞は自己免疫疾患だけでなく、がん免疫療法にも応用が期待されているのはご存知の通りで、がん治療における最新治療法のひとつを基礎から臨床まで幅広い角度で議論いただきます。阪大医学部学友会ならではの企画をお楽しみください。

※参加ご希望の方は、「同封のご案内」に掲載の方法にてご登録いただくか事務局までお問合せください。[Tel 06-6879-3501]

令和7年 秋の叙勲・褒章

文化勲章 川島康生(昭30)
 紫綬褒章 熊ノ郷 淳(平3)
 藍綬褒章 笠原幹司(昭61)
 瑞宝中綬章 遠山正彌(昭47)
 瑞宝中綬章 米延策雄(昭48)

令和8年 春の叙勲・褒章

瑞宝双光章 宮里達也(昭53)

令和7年秋から令和8年春の受賞(発表順)

日本医師会優功賞	笠原幹司(昭61)
日本医師会医学賞	長澤丘司(昭62・名大医)
救急医療功労者 大阪府知事表彰	織田 順(平5)
救急医療功労者 大阪府医師会長表彰	荒堀仁美(平8)
学校保健及び学校安全表彰	井藤尚之(昭56・金沢大医)
ノーベル生理学・医学賞	坂口志文(昭51・京大医)
持田記念学術賞	竹内 理(平7)
ベルツ賞2等賞	山縣和也(昭62)
上原賞	竹内 理(平7)
日本国際賞	審良静男(昭56)

級会・支部交流会が開催されました

今年も級会・支部交流会が5月30日の総会に合わせて開催されました。コロナ禍のため、しばらく開催されない期間がありましたが、昨年6年ぶりに復活、今年も多数の先生方のご参加をいただき、賑やかに執り行われました。各級会、支部の活動をご報告いただき、懇親を深めていただく機会として必須の集まりですので、今年も無事に開催されたことを喜ばしく思います。

当日は級会代表や級会世話人、支部長や支部世話人、医学部各教室世話人、そして学友会の役員をあわせて合計43名ご参加いただきました。今年も幅広い年齢層の先生方がお集まり下さり、本会の歴史と結束を感じることでありました。

吉川秀樹理事長のごあいさつのあと、通常では各先生方からの活動報告に移るところですが、今年めでも御年100歳を迎えられた昭和26年卒、豊中支部の木村正治先生のご参加をいただき、吉川理事長よりお祝いと、花束贈呈のサプライズから会が始まりました。木村先生より一言頂戴しましたが、そのお元氣そうな様子に一同感嘆し、大きな拍手で先生の100歳をお祝い致しました。

その後、参加された先生方からのご挨拶と報告を順次いただきました。支部の活動報告では、大人数

の支部も小規模の支部もそれぞれ工夫して集まりを企画されていました。級会からもそれぞれの年齢層に応じた活動のお話を聞くことができました。この会で他の級会の話の聞き、自分たちも集まりを企画したというご報告もありました。臨床系の教室からは、新しい阪大病院のもと、活発な教室運営の報告を頂きました。また来年、第32回日本医学会総会2027が大阪で開催されるとのこと、大阪大学を挙げて総会に向けて準備を頑張っておられるご様子でした。

今年も多くの先生方にご参加いただきましたが、皆様のご協力により、出席されたすべての支部、級会、教室のご報告をいただき、時間内に終えることができました。散会後も、三々五々談笑の輪ができ、楽しげなご様子でした。来年以降も途切れることなく、会を継続していきたいと思えます。

総会行事終了後の懇親会を以前のように開催してほしいというご要望もいただいております。諸事情ございますが、理事会および事務局で検討してまいります。毎年の5月最終土曜日は単なる法令上の総会のみではなく、会員の先生方の交流の場となるようにしてまいりたいと考えておりますので、来年以降も多くの先生方にお会いできることを楽しみにしております。

藤本美穂(平5)



寄 附 御 礼

令和8年4月16日から令和8年8月4日までに、1,064,223円のご寄附を頂き、誠に有難うございました。公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は個人・法人とも、所得控除制度の対象となります。(控除方法の一つである税額控除制度は令和8年7月13日にて認定期限を終了いたしました。) 詳細に関しては、事務局までお問い合わせください。

木村 正治 先生(阪大医 昭26) より、20,000円をご寄附いただきました。
 森本 靖彦 先生(阪大医 昭36) より、10,000円をご寄附いただきました。
 豊坂 昭弘 先生(阪大医 昭41) より、300,000円をご寄附いただきました。
 花房 俊昭 先生(阪大医 昭50) より、50,000円をご寄附いただきました。
 福澤 正洋 先生(阪大医 昭50) より、50,000円をご寄附いただきました。
 三好 智満 先生(阪大医 平5) より、30,000円をご寄附いただきました。
 片岡 竜貴 先生(阪大医 平13) より、30,000円をご寄附いただきました。
 宝塚支部より19,223円、大阪大学同窓会連合会より、15,000円をご寄附いただきました。
 小濱 譲次 先生(阪大医 昭47) より、金一封をご寄附いただきました。
 吉峰 俊樹 先生(阪大医 昭50) より、金一封をご寄附いただきました。
 西澤 恭子 先生(阪大医 昭50) より、金一封をご寄附いただきました。
 佐々木 良二 先生(阪大医 昭53) より、金一封をご寄附いただきました。
 澤田 佳宏 先生(阪大医 昭54) より、金一封をご寄附いただきました。
 山本 茂生 先生(阪大医 昭57) より、金一封をご寄附いただきました。
 樂木 宏実 先生(阪大医 昭59) より、金一封をご寄附いただきました。
 木岡 秀隆 先生(阪大医 平12) より、金一封をご寄附いただきました。
 匿名の会員様より50,000円を1件、30,000円を2件、1名の会員様より金一封をご寄附いただきました。

次期役員選挙にかかる候補者への立候補・候補者ご推薦のお願い(公示)

公益社団法人医学振興銀杏会 役員選挙管理委員会 委員長 荻原俊男

本会の現役員(理事・監事)任期は、令和9年5月29日開催予定の社員総会終結時をもって満了します。「役員選挙規則」に従い、下記の通り次期役員選挙を実施することをここに公示します。

- ①全会員から次期役員への立候補ならびに候補者推薦を公募(このご案内)
- ②当会代議員である先生方による選挙(令和9年1月に郵送で実施)
- ③令和9年5月29日の総会にて承認

次期役員への立候補もしくは次期役員に適任と思われる会員の推薦を書面に受け付けます。下記事務局へご連絡いただきましたら、所定の用紙をお送りします。(当会Webページ、<https://www.ichou.or.jp/>からも用紙をダウンロードいただけます)

なお、規則により役員は特定の年齢層や職種(大学・公的病院・開業医等)に偏らない選出が必要です。ご配慮の上、幅広い立候補・推薦をお願い申し上げます。(複数人推薦いただいても結構です)

立候補・推薦の締め切りは10月31日(必着)とさせていただきます。

事務局(連絡先および提出先) 〒565-0871 吹田市山田丘2-2

公益社団法人医学振興銀杏会(大阪大学医学部学友会)

(tel) 06-6879-3501 (fax) 06-6879-3503 (E-mail) office@ichou.med.osaka-u.ac.jp

※役員(理事・監事)の職務: 理事会(定例理事会は年2回)および定時社員総会への実出席。

監事はさらに4月の会計監査を実施。

別表: 役員の定数(年齢は、令和9年4月1日現在)

理事 15~20名	55歳以下	6~10名	監事 2~5名
	56歳~77歳	8~12名	

業務執行理事の業務分掌

助成	研究助成・奨学金事業の企画立案及び実施、総会授与式
情報	銀杏メディカルネットの運営、名簿の作成、ML・メールアドレスの統括
広報	ニュース編集・発行、この法人の事業内容の広報・周知
学術	会誌の編集・発行、シンポジウムの企画・実施、医学史研修の実施
会計	歳入、歳出の予算及び決算に関する事項、会費の徴収、経費の支出、預貯金及び金銭の保管、理事会・総会における予算・決算報告
庶務	会議の開催、渉外、慶弔、文書の作成並びに保管ほか、いずれの分担業務にも属していないもの

公益社団法人 医学振興银杏会
正味財産増減計算書

2025年4月1日から2026年3月31日まで

(単位：円)

科 目	前年度	当年度	当年度内訳		
			公益目的事業	共益事業	法人会計
I 一般正味財産増減の部					
1. 経常増減の部					
(1) 経常収益					
基本財産運用益	167	1,205	1,205	0	0
特定資産運用益	5,333	109,497	104,438	5,059	0
受取会費	23,595,000	22,220,000	13,920,000	4,550,000	3,750,000
事業収益	2,425,000	146,000	96,000	50,000	0
受取寄附金	9,369,100	6,004,000	6,000,000	4,000	0
受取寄附金振替額	17,488,070	19,550,564	19,550,564	0	0
雑収益	430	8,770	8,770	0	0
他会計からの繰入額	0	0	0	0	0
経常収益計	52,883,100	48,040,036	39,680,977	4,609,059	3,750,000
(2) 経常費用					
支払助成金	21,350,000	20,260,000	20,110,000	150,000	0
支払寄附金	0	0	0	0	0
地域医療ネットワーク費	187,485	319,132	319,132	0	0
通信運搬費	4,776,109	2,118,836	405,270	1,423,663	289,903
印刷製本費	7,250,317	2,239,374	1,148,967	972,229	118,178
コンピューター費	91,589	194,068	194,068	0	0
給与手当	14,004,410	15,419,774	12,335,820	1,541,977	1,541,977
退職給付費用	1,300,000	3,239,125	2,593,125	323,000	323,000
福利厚生費	2,918,407	3,330,066	2,159,361	269,920	900,785
旅費交通費	491,164	566,556	435,361	53,627	77,568
消耗什器備品費	220	1,056	1,056	0	0
消耗品費	132,177	315,936	313,743	0	2,193
修繕費	0	0	0	0	0
光熱水料費	171,729	169,420	135,536	0	33,884
支払手数料	343,907	245,930	221,678	550	23,702
減価償却費	106,590	106,590	106,590	0	0
会議費	184,845	394,628	0	0	394,628
新聞図書費	9,497	43,462	0	0	43,462
研修費	119,248	545,266	545,266	0	0
雑費	20,250	22,251	0	0	22,251
経常費用計	53,457,944	49,531,470	41,024,973	4,734,966	3,771,531
評価損益等調整前当期経常増減額	△ 574,844	△ 1,491,434	△ 1,343,996	△ 125,907	△ 21,531
基本財産評価損益等	0	0	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0	0	0
評価損益等計	0	0	0	0	0
当期経常増減額	△ 574,844	△ 1,491,434	△ 1,343,996	△ 125,907	△ 21,531
2. 経常外増減の部					
(1) 経常外収益					
固定資産売却益	0	0	0	0	0
経常外収益計	0	0	0	0	0
(2) 経常外費用					
固定資産売却損	0	6	6	0	0
退職給付費用(過年度計上不足分)	0	3,760,000	3,008,000	376,000	376,000
経常外費用計	0	3,760,006	3,008,006	376,000	376,000
当期経常外増減額	0	△ 3,760,006	△ 3,008,006	△ 376,000	△ 376,000
当期一般正味財産増減額	△ 574,844	△ 5,251,440	△ 4,352,002	△ 501,907	△ 397,531
一般正味財産期首残高	88,696,733	88,121,889			
一般正味財産期末残高	88,121,889	82,870,449			
II 指定正味財産増減の部					
受取寄附金等	15,330,300	15,648,750	15,648,750		
一般正味財産への振替額	17,488,070	19,550,564	19,550,564		
当期指定正味財産増減額	△ 2,157,770	△ 3,901,814	△ 3,901,814		
指定正味財産期首残高	79,804,743	77,646,973	77,646,973		
指定正味財産期末残高	77,646,973	73,745,159	73,745,159		
III 正味財産期末残高	165,768,862	156,615,608			

ホームページも公開しております。ホームページアドレス <https://www.ichou.or.jp/joho.html>

助成金事業採択者一覧(敬称略。1、2、3は令和8年5月30日総会で授与式を行いました。)

1. 2025年度 地域医療に関する研究助成、3件、各50万円

河岡孝征：前腕ループグラフを用いた動静脈シャント作成術における橈骨動脈吻合と上腕動脈吻合の比較－ランダム化比較試験－
佐竹祐人：生成AI会話ロボットの在宅導入による独居軽度認知障害(MCI)者の孤独・抑うつ軽減：地域医療における実装可能性試験
南 健介：外傷初期診療におけるノンテクニカルスキルを構成する言語パターンの解析

2. 2026年度 学友会奨学金採択者、15件、各20万円

学部学生：荒上宏斗、稲田 彪、植木裕也、田口武人、田村 響、西村洋志、土方優輝、福岡重隆、堀 建哉、水野颯太
大学院生：井上采人、孫 叢叢、Nandinanti Andila Bulan、本田昂湧、MAO YUFEI

3. 2026年度 岸本基金奨学助成金採択者、12件、1年次：60万円、2～6年次：120万円

(1年次)甲斐悠真、久枝 晴 (2年次)椿原裕太郎 (3年次)黒川智暉、田島卓実 (4年次)堤 美紅、長島真由 (5年次)田代大貴、水野佐和子
(6年次)下野匠人、豊田浩亘、永安郁弥、森 裕 一郎

4. 2025年度 国際学術交流助成事業 11件 11～20万円

今井大達(整形外科、豪)、江崎明彦(組織生化学、独)、奥嶋拓樹(腎臓内科学、奥)、佐邊秀彬(免疫細胞生物学、豪)、滋野聡(消化器内科学、米)、田口卓良(心臓血管外科学、米)、
徳地真帆(腎臓内科学、米)、春名健伍(消化器外科学Ⅱ、米)、水元理絵(消化器外科学Ⅰ、米)、溝端裕奈(保健学専攻 生体病態情報科学、米)、三宅 佑(運動器バイオマテリアル学、瑞)

トピックス

脳神経外科手術の進歩

脳神経外科の手術については、「顕微鏡を使って細かな操作を長時間にわたり行い、しばしば翌朝まで続く」というイメージがよく語られていました。しかし、この20余年の間に、術前の手術計画や診断技術、さらには手術支援機器が大きく発展し、脳神経外科手術のあり方は大きく変わっています。ここでは、脳神経外科で用いられる手術機器と新しい技術について紹介いたします。

手術ナビゲーションシステム

これは1990年代から発展した技術であり、当時は加藤天美先生(S54阪大卒)がこの機器の開発の第一人者でした。自動車のナビゲーションシステムと同様に、赤外線カメラや磁場の変化から、モニターに映し出された画像上に、手術操作を行っている部位を示すことができます。任意の手術機器の先端や顕微鏡の焦点部位などを手術操作部として認識することができます。画像処理の進歩に伴い、精度や利便性が向上しており、現在では欠かせない手術支援機器となっています。

手術外視鏡

脳神経外科の手術といえば、顕微鏡を用いているため、術者だけが複眼(立体視)で観察しながら手術を進め、助手を含めて周りの人は顕微鏡から送られる2D画像をモニターで観察している、という様子を想像されることが多いと思います。近年の光学技術やデジタル技術の向上もあり、顕微鏡システムは視認性も含め、大きく変化しています。さらに最近ではexoscopeと呼ばれる外視鏡が導入されました。外視鏡とは、カメラを体外に置き、拡大画像を3Dモニターに映し出す装置です。術者だけでなく、手術室の全員が3D画像で術野を観察できます。モニターを見ながら行う手術はhead-up surgeryと呼ばれ、カメラの可動性も広いため、術者が自然な姿勢で手術を進めることができます。阪大では、顕微鏡手術の多くが外視鏡手術に置き換わっています。また、脳内や術野に挿入できる内視鏡手

術も広く普及しています。

術中MRI

術中MRIとは、その名前の通り、手術室に設置したMRI機器で手術中に術野を展開したまま撮像できるシステムです。阪大では統合診療棟が開設された2025年5月に導入されました。主に脳腫瘍手術に利用されています。残存腫瘍の確認に有用で、その場で安全に追加切除を行うための手助けとなります。

覚醒下手術

脳内に浸潤性に発生するグリオーマなどの腫瘍の場合は、できるだけ大きく摘出することが望まれる一方で、日常生活に影響する重要な脳機能は温存しなければならないというジレンマがあります。電気生理学的モニタリングや術前の検査である程度の機能局在診断は可能ですが、脳回単位に正確に診断することは未だ困難です。そこで、麻酔科の先生のご協力の下、患者を術中に麻酔から覚醒させ、運動や言語などのタスクを行い診断しながら切除を行うという方法が用いられるようになりました。頭蓋の開頭までは全身麻酔下で行い、電気刺激で機能部位を検索したり、自発的な言語タスクや運動タスクを施行したりしながら腫瘍を摘出します。これにより、最大限で安全な脳腫瘍の摘出が実現できるようになりました。

そのほかにもドリル、バイポーラ、超音波メスなどの細かな機器も進化しているのはもちろんのこと、定位手術が可能なロボットも使用できるようになっています。

貴島晴彦(平3)



医学部長通信 第31回 石井 優(平10)

ショヒョックス

東野圭吾の初期の短編小説に、仕事に追われる書評家のための「ショヒョックス」なる機械が登場します。この機械は小説を要約し、書評まで自動で作成してくれます。甘口・辛口の切り替えも可能で、書評家ごとの文体や好みに合わせた調整機能まで備えています。ショヒョックスが普及する一方で、作家側には「ショヒョックス・キラー」なる装置が現れます。こちらはショヒョックスで高評価を獲得できる小説を書いてくれる機械です。その販売員は作家にこう売り込みます、「いいですか。現在、ほとんどの評論家はショヒョックスを使って仕事をしています。彼ら自身は本など読んでいません。読者はその書評を見て本を買うのです。要するに、作家が意識すべきなのは読者ではなくショヒョックスなのです。文学賞の選考も、その大半がショヒョックスの評価を基準に行われています」・・・しかし、そうしてショヒョックス・キラーによって書かれた“ベストセラー”を実際に読んでみると、全く面白くない—それがこの作品のオチです。

平成13年の刊行当時、この物語は単なるブラックユーモアでしたが、令和8年生きる私たちは、もはやこれを笑えません。論文や研究費申請書の執筆だけでなく、それらの査読や審査にまでChatGPTをはじめとする生成AIが活用される現在の状況を、まるで予言していたかのようです(※最近では審査に生成AIを用いることは禁じられるようになってきました)。生成AIは圧倒的な利便性を持ち、今や多くの知的労働に欠かせない存在となりました。その恩恵によって業務効率化につながる一方で、AIを用いて効率化してはいけない業務にも残念ながら利用されています。

もっとも、この問題は生成AIの登場によって突然生じたものではないのかもしれませんが。1990年代に雑誌のImpact Factor(IF)が広く定着して以降、FWCIやh-indexなど、研究を“客観的”に評価する指標が次々と開発されてきました。私たちは知らず知らずのうちに、本来であれば研究者自身が行うべき学術的価値の評価を、こうした指標に「代行」させてきたとも言えます。研究費審査や教員評価では、これらの数値指標が重要な判断材料として用いられています。その結果、評価者が実際に論文を読み込み、その独創性や学術的意義を吟味する機会は少なくなりました。一方で、高IF誌に掲載されるためのノウハウも高度化し、研究者は競うようにそこへ時間と資金を投入しています。果たして、そうやって作られた「高IF研究」は実際に面白いのでしょうか？

昨今、若手医師の“科学離れ”に問題提起がなされています。しかしながら、論文を読んで研究の真の価値や面白さを語ることを疎かにして、IFなど客観指標を上げる技術論に終始してきた現役世代の“科学離れ”も顧みないといけなないのかもしれない。

提

言

統計と医療 ～ナイチンゲールから現代のビッグデータまで～

今期のNHK朝ドラ「風、薫る」は「明治のナイチンゲール」と称された大関 和さんをモデルとした作品です。近代看護という未知の世界に飛び込んだ女性たちの姿が描かれています。

本家本元の英国人フローレンス・ナイチンゲールは、「クリミアの天使」としてランプを手に負傷兵たちが収容されている病棟を巡回する姿が広く知られています。しかし、彼女は看護師としてだけでなく、医療統計の専門家としての役割も果たしました。クリミア戦争（1853～1856年）に従軍したナイチンゲールは、野戦病院での死者の記録を丁寧に集計し、戦傷による死亡よりも感染症での死亡が圧倒的に多いことを明らかにしました。そこで、野戦病院の清掃や衛生環境の改善という介入を行った結果、死亡率を大幅に改善しました（1855年2月：42.7%→同年6月：2.2%）。その知見を鶏頭図と呼ばれる独創的な図表で可視化した報告書を作成し、男性が圧倒的多数を占めていた議会や軍当局に対して発表を行い、彼らを動かして病院環境の抜本的改善を実現しました。

彼女の統計家としての貢献は兵士を対象としたデータの解析にとどまりません。ナイチンゲールは病院統計の

標準化にも取り組みました。「入院期間」の概念を取り入れ、死亡率を病棟ごと・疾患ごと・施設間ごとに算出・比較することを可能にし、「病院の質」を数値で可視化・評価する手法を確立したのです。それまでは断片的な記録は存在していましたが施設間の比較や経時的分析には程遠いものでした。これは現代の病院評価や医療統計における死亡率・平均在院日数指標の原型にほかなりません。

近年、レセプトやゲノム情報を含めたビッグデータを用いた研究が盛んになり、生成AIの普及もあいまってデータ分析は飛躍的に身近になりました。歴史を振り返ると、やみくもにデータを収集し解析するのではなく、「何を問うか」という視点と、結果を政策に結びつける実践の重要性を改めて教えてください。

『白衣の天使』と呼ばれた看護師も、今は機能的なスクラブに身を包み、電子カルテに記録をつけ、私達医師や研究者はそのデータを活用させていただいています。その日常の風景の中に、170年前からの統計改革の積み重ねがあることを思えば、私たちが扱うひとつひとつのデータにも、おのずと重みが加わるように感じます。

馬場幸子（平16）



…その176

阪大病院病院長を終えて

2024年4月から2026年3月まで阪大病院の病院長を務めました。昨今、病院経営は大変だという事は皆さんよくご存じかと思いますが、特に大学病院の様に高度な医療を提供し、研究や教育まで担っている病院はさらに財政的に大変です。また、阪大病院では10年以上前から統合診療棟の建設という再開発が計画されており、巨額の借金を負うことがわかっておりました。コロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻などによって物価高騰がおり、医療機関の経営はこれまで以上に大変となってきた時期の病院長は大変な困難が予想されていました。私は、これまでに医学部の財務委員長を7年、大学本部の財務オフィス委員を2年、阪大病院の財務担当副病院長を2年務めておりましたが、そのことが、私が病院長に適任であると皆様判断された理由かと思えます。病院長に選任されて実行したいと考えたことが二つありました。一つは、やはり「経営改善」です。もう一つは、「頑張っている人（個人）へのインセンティブ付与」でした。経営改善については、財務担当副病院長を担当いただいた坂田先生（現在の病院長）や管理課の皆様とともに様々な取り組みを行いました。経営改善の基本は増収とコスト削減ですが、阪大病院のような大きな組織の中では「無駄」が多いのです。例えば手術用の縫合糸にしても、廉価品との違いを手術に携わる人

たちは感じることなく、販売業者から勧められるままに高いものを使っています。無駄を減らし、増収のための病床稼働率の向上と手術件数の増加を図りました。これらを実行するために最も大切なことは、全職員の意識が「経営改善のために努力する」という方向に向けることだと考えました。すなわち「意識改革」です。折しも統合診療棟の建設、開院がありましたので、病院の全職員の気運が高まっていたことは幸いであったと思います。意識改革をベースにした経営改善策は見事に功を奏し、病院の経営状況はかなり改善しました。もう一つの目標であった、頑張っている職員への個人的なインセンティブ付与については、何度も大学総長や病院担当理事と面談し、ようやく許可を得ることができました。このインセンティブ付与は現在の病院長の下でついに実現することになります。2年間はあっという間でしたが、その間病院長として大変充実した時期を過ごすことができました。私を支えてくださったすべての病院職員にこの場を借りて感謝申し上げます。

次回は、大阪大学大学院医学系研究科薬理学講座統合薬理学教授の日比野浩先生（平6）にお願いしました。

野々村祝夫（昭61）

診療科 紹介

消化器内科

当教室は、平成17年に本学内科学講座の臓器別再編成により、大阪大学大学院医学系研究科内科学講座消化器内科学教室として設立されました。初代教授として林紀夫先生が教室の基盤を築かれ、平成23年には竹原徹郎先生が教授に就任され、診療・研究・教育の各分野において教室を大きく発展させてこられました。そして令和8年1月1日付で、私がその後任として就任しました。当教室は比較的新しい教室ではありますが、旧第一内科、旧第二内科、旧第三内科における消化器グループの流れを汲み、長年にわたる臨床・研究・教育の蓄積の上に成り立っています。

現在、当教室は現有医局員72名、900名を超える同窓会員を擁し、約30の関連病院と一体となって、消化器病学の診療・研究・教育に取り組んでいます。消化管疾患、肝疾患、胆膵疾患、炎症性腸疾患、消化器癌など、消化器内科全領域を対象とし、一般的な消化器疾患から難治性・希少疾患まで幅広く受け入れています。大学病院として、最新の知見と高度な医療技術に基づいた専門性の高い医療を提供するとともに、消化器外科、放射線科、病理診断科をはじめとする多職種・多診療科との連携を重視し、内科・外科の垣根を越えたシームレスな診療を実践しています。

診療面では、内視鏡診療、炎症性腸疾患診療、肝胆膵疾患診療、消化器癌診療を柱とし、患者さん一人ひとりに最適な医療を届けることを第一に考えています。消化管領域では、食道癌、胃癌、大腸癌に対する精密診断と内視鏡治療を推進し、胆膵領域ではEUS、ERCPを基盤とした早期診断、内視鏡治療、集学的治療に取り組んでいます。肝疾患領域では、ウイルス性肝炎、脂肪性肝疾患、肝硬変、肝癌に対し、薬物療法、局所療法、カテーテル治療を含む包括的な診療を展開しています。また、潰瘍性大腸炎、クローン病などの炎症性腸疾患に対しても、生物学的製剤を含めた専門的

治療を行っています。

研究面では、「臨床から問いを立て、研究で答えを出し、再び患者に還元する」ことを基本姿勢としています。慢性炎症、代謝異常、線維化、腸内細菌叢破綻、がん微小環境、免疫制御など、消化器疾患に共通する病態の本質に迫る研究を推進しています。基礎研究、トランスレーショナル研究、多施設共同臨床研究、医師主導治験を有機的に結び付け、バイオバンク、動物モデル、マルチオミクス解析を活用しながら、新たな診断法、治療標的、バイオマーカーの創出を目指しています。消化管、胆膵、肝疾患、炎症性腸疾患の各研究グループが、関連病院との多施設共同研究を行い、実臨床に根ざしたエビデンスを国内外へ発信しています。

教育においては、高い臨床能力と研究マインドを併せ持つAcademic Physicianの育成を重要な使命としています。初期研修、消化器内科専門研修、大学院、海外留学、関連病院での臨床修練を通じて、若手医師がそれぞれの志に応じて成長できる環境を整えています。豊富な症例と手厚い指導体制のもとで臨床力を磨き、同時に科学的視点を持って日常診療の疑問を研究へ発展させる姿勢を大切にしています。

当教室の理念は“Empowerment”です。教室員一人ひとりが、それぞれの立場やライフステージに応じて能力を発揮し、成長できる環境を整えることを大切にしています。消化器内科の臨床が好きな人、研究に挑戦したい人、世界に羽ばたきたい人、地域医療を支えたい人——多様な志を持つ若い先生方が安心して集い、互いに刺激し合いながら成長できる教室でありたいと考えています。「人が育ち、知が生まれ、世界へとつながる消化器内科」として、今後も診療・研究・教育を通じて、患者さん、地域医療、そして世界の消化器病学の発展に貢献してまいります。

小玉尚宏 (平14)



病院・施設紹介

兵庫県立西宮総合医療センター

兵庫県立西宮病院と西宮市立中央病院の統合再編に関する基本協定が締結されたのは、2019年1月のことでした。以後、コロナのパンデミック、インフレ、そして病院経営の悪化など、統合再編の行く手には予期せぬ重大な試練が次々と立ちはだかりました。しかし、これらの困難を何とか乗り越え、ほぼ予定通り今年7月1日、阪急今津線・阪神国道駅の目の前に、統合新病院「兵庫県立西宮総合医療センター」を無事開院することができました。

新病院は11階建て(552床)で、周囲の街並みに美しく溶け込む落ち着いた色調が特徴です。館内には最新の医療機能を効率的に配置しました。1階には救命救急センター(E-ICU 8床)や各種放射線診断室、内視鏡室を配置し、別棟に放射線治療科を設けています。2階は総合受付や外来、採血・生理検査室、コンビニがあり、3階は管理部門や医局、薬剤部などが集約されています。4階にはハイブリッドORを含む12室の手術室のほか、G-ICU(6床)、HCU(8床)、透析室(15床)、アイセンター、リハビリ室などを配置。5階にはNICU(6床)・GCU(10床)や産婦人科・小児病棟、ハートセンターを設け、6階から10階を一般病棟としました。なお、7階にはSCU(6床)と放射線内用療法病室(2床)を備えています。さらに、感染症専用の初療室やエレベーターを整備したほか、敷地内には西宮市の救急ワークステーション、保育所、立体駐車場も併設。屋上ヘリポートに加え、敷地内へのバス停設置も予定しています。

従来の25診療科から35診療科へと拡充された新病院は、「総合医療センター」の名にふさわしい充実した診療機能を誇ります。すべての診療科で高度専門医療

を実施しますが、特に力を入れているのが救急医療です。敷地内の救急ワークステーションに西宮市の消防隊が常駐することで、病院と救急隊がこれまで以上に緊密に連携します。また、救命救急センターには最新の「ハイブリッドER」を導入しました。これにより、患者を移動することなく同一の部屋で「CT検査」「血管内治療」「手術」をシームレスに行うことが可能となり、患者様の身体的負担の軽減とタイムロスの削減、ひいては救命率の向上が期待されます。また、県指定のがん診療連携拠点病院、および地域周産期母子医療センターとしての機能も強化しています。がん医療においては、安全ながん薬物療法を提供する「オンコロジーセンター」の設置や高精度放射線治療装置を導入。周産期医療においては、広々とした先進的なNICUを整備しました。さらに、県立西宮病院で53年の歴史を重ねてきた腎移植医療も新病院でしっかりと継続します。コロナ禍の経験を活かし、感染症指定病院と同等レベルの受け入れ体制を整えたことも大きな特徴です。

これらに加え、新病院では「スマートホスピタル」の実現を目指しています。医療従事者用スマートフォンやWEB予約、AI問診、AI画像診断、搬送ロボットといったデジタル技術を駆使し、医療の質の向上、患者様の利便性向上、そしてスタッフの負担軽減を同時に推し進めてまいります。「患者さんが行きたくなるのみならず、医療従事者が働きたくなるスマートホスピタル」を目指し、職員一同、全力で邁進してまいります。これからの兵庫県立西宮総合医療センターに、どうぞご期待ください。

兵庫県立西宮総合医療センター
院長 野口眞三郎(昭55)

